

濟定檢省部文
日三十月一年七和昭

教科書文庫

4
815
41-1932
2000080452

新制

國文典

社會式株
院書國帝

41867

教科書文庫

4
815
41-1932
20000 80452

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

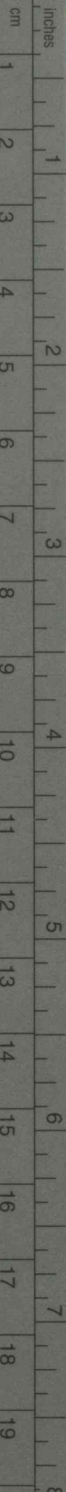


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室
濟定檢省部文
日三十月一年七和昭

教科書文庫
4
815
41-1932
2000080452

新制 國文典

著共 郎種川笹 士博學文
直正根關 士博學文



広島大学図書
2000080452


社會式株
院書國帝

42
815
BB6

緒言

本書は、新制の中學校國語科教授要目により、現代語法の知識を正確に得させることを主眼とした。今その用意の一端を擧げると、

- 一 實例を先にし説明を後にし、理論を避けて實用を旨とした。
- 二 文語法と口語法との相近似せるものを對照して、その理解を容易ならしめた。
- 三 口語法特有の法則はなるべく詳細にこれを説き、文語法の法則の口語法に相通ずるものは、文語法に譲つて簡略ならしめた。
- 四 實例は多く現代文に求め、練習は口語法にも多からしめた。

等である。要するに、本書は口語法に重きをおいて、文法のやゝもすれば實際に遠ざかる弊を救ひ、且説明を極めて平明にして、教授に便ならしめたものである。

目次

第一章	總說	一			
第二章	品詞	三			
	名詞	代名詞	動詞	形容詞	助動詞	
	助詞	副詞	接續詞	感動詞		
第三章	用言の活用	八			
第四章	送假名	一〇			
第五章	文語の動詞の活用形	三			
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
第六章	文語の動詞の活用の種類	一五			
	四段活用	二段活用	一段活用	變格活用		

第七章 文語の動詞の活用の識別……………二六
第八章 口語の動詞……………三〇

四段活用 上一段活用 下一段活用 カ行變格活用
ナ行變格活用

第九章 文語の動詞の語尾の假名遣……………三七

第十章 文語の形容詞の活用と活用形……………四二

第十一章 口語の形容詞……………四七

第十二章 用言の音便……………五七

イ音便 ヲ音便 撥音便 促音便

第十三章 文語の助動詞の種類……………六一

受身 可能 使役 尊敬 時
打消 推量 指定 詠歎 希望
比較

第十四章 文語の助動詞の活用……………六〇

動詞狀活用 形容詞狀活用 特殊活用

第十五章 口語の助動詞……………六四

受身 可能 使役 尊敬 時
打消 指定 推量 希望

第十六章 副詞の用法……………七三

第十七章 形容動詞……………七五

第十八章 助詞の種類……………六六

體言に附屬する助詞 用言に附屬する助詞
種々の語に附屬する助詞

附表 國語假名遣一覽表

動詞活用文語・口語對照表

助動詞活用文語・口語對照表

文字 文 口語 文語 文法

新國文典

第一章 總說

人の思想を聲音にあらはしたものが言語である。言語を形にあらはした符號が文字である。文字で一つのまとまつた考をあらはしたものが文である。

言語は談話に用ひるものを口語といひ、文に用ひるものを文語といふ。現代は口語でかゝれた文が一般に行はれてゐる。

口語及び文語には、それ／＼一定の法則がある。それを文法といふ。文法に従はねば、何人もその思想を正しく表す事が出来ない。風が吹く。波が高い。(口語)

主語
述語
單語

九品詞

風吹く。 波高し。(文語)

文は右のやうに風波といふやうな語と、その題目について語る吹く高し(高い)といふやうな語とから成立つてゐる。その題目となる語が主語、題目について語る語が述語といはれる。

言語の單位である一つ一つの語は、單語と名づける。右の例でいふと、口語は風が吹くの三つの單語からなり、文語は風吹くの二つの單語からなりたつてゐるのである。

單語をその性質作用の上から類別すると、次の九種となる。

- 名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 助詞
- 副詞 接續詞 感動詞

この九種のの一つ一つを品詞と名づける。即ちあらゆる單語は、右の九品詞のいづれにか屬するのである。

名詞

代名詞

第二章 品詞

名詞

- 花 鳥 風 月 日本 支那
- 乃木將軍 ナポレオン 太陽
- 雲 勉強 幸福 健康 病氣

右のやうに、人または事物の名をあらはす單語を名詞といふ。また一・二・三つ・四つ・五番・六枚・第八などのやうに、數量または順序をあらはす單語も、名詞に數へられる。

代名詞

- 我 汝 わたくし あなた
- かれ たれ こゝ そこ
- あちら こちら そちら

體言

右のやうに、名詞のかはりに用ひられる單語を代名詞といふ。名詞代名詞を總稱して體言といふ。體言は文の主語となる種類の語である。

動詞

動詞

教ふ。習ふ。行く。走る。見る。
探す。待つ。死ぬ。在り。居り。

右のやうに、事物の動作または存在をあらはす單語を動詞といふ。

形容詞

形容詞

重し。正し。白し。清し。高し。
けはしい。はげしい。うれしい。

右のやうに、事物の性質・状態をあらはす單語を形容詞といふ。

助動詞

助動詞

教へらる。習ひたり。行かず。見む(ん)。

用言

教へられる。習つた。行かない。見よう。

右のやうに、動詞に結びついてその意味を助けるらるたりずむ(ん)られるたないようなどの單語を助動詞といふ。

動詞・形容詞・助動詞を總稱して用言といふ。用言は文の述語に用ひられる種類の語である。

動詞・形容詞の二品詞を用言とするのが通例であるが、本書には説明の便宜上、助動詞をも總稱することにした。

助詞

助詞

花のさかり。柳は緑。山にのぼる。
橋を渡る。夏がきた。海より深い。

右のやうに、他の品詞について品詞と品詞との關係を示すのはにをがよりなどの單語を助詞といふ。

副詞

副詞

接續詞

風なほやまず。きはめて美し。
風がまだやまない。大層美しい。

右のやうに、専ら動詞・形容詞の意味を限定するなほきはめてまた大層などの單語を副詞といふ。

接續詞

梅及び櫻を植ゑたり。

私には兩親もあり、また兄弟もある。

右のやうに、他の品詞または文を接續する及びまたなどの單語を接續詞といふ。

感動詞

感動詞

あゝ、悲しいかな。

あな、はづかしや。

おゝ、うれしい。

右のあゝ、あな、おゝなどのやうに感動の意をあらはす單語を感動詞といふ。

練習

次の文は各幾個の單語から出來て居るか。

- 一 日光の山中六里の間は一面の紅葉なり。
- 二 此方の海の上に不思議なものが現れた。
- 三 夫に別れ妻に離れ、歎き苦しむ者天下に滿つ。
- 四 そこは小さい山の麓で、家が五六軒見える。
- 五 後年、天下に名をあげた學者は、實にこの人である。

次の文中から名詞と代名詞とを選び出せ。

- 一 私に知識を與へられたのは、あなたの父上である。
- 二 Q あの光の世界が、この時、彼の眼の前にあらはれた。
- 三 日暮れて後、こなたの家の軒端にのぼり、かしこに忍びゆきて、そ

の雀の子を捕ふべし。

次の文中から動詞と形容詞とを擇び出せ。

○ 太陽は西方に横たはる沙漠の、遠い山に沈んだ。

○ 深き霞もやゝ晴れて行手を急ぐ旅人の小笠の上に雲雀啼く。

○ ながい間、深い雲の中に閉ぢ込められて居た。

次の文中から副詞・接續詞・感動詞を擇び出せ。

一 俳句の妙味は終に説明すべからず。されど字句の解釋はさ
で難きにあらざるなり。

二 おゝ月が。私は覺えず馬上でかう叫んだ。

三 實に立派な抱負だ。然し果して實行が出来るか。

第三章 用言の活用

鳥鳴か……むん。

動詞
諸辰、夏代、冬代

鳥鳴き……たり。

鳥鳴く。

鳥鳴け……ども。

右のやうに「鳴く」といふ動詞はその形が變るのである。

砂白く……水清し。

砂白し。

砂白き……濱邊。

砂白けれ……ど。

右のやうに「白し」といふ形容詞はその形が變るのである。

花咲きたら……むん。

花咲きたり。

花咲きたる……日。

花咲きたれ……ども。

右のやうに「たり」といふ助動詞はその形が變るのである。以上のやうに、鳥砂花などの體言はその形が變らないが、用言はいづれもその形が變るのである。このやうに用言の形の變ることを活用と名づける。そしてその變らぬ部分を語根、變る部分を語尾といふ。

送假名

第四章 送假名

雀。鶯。昔。庵。汝。私。書付。受取。
右のやうに、體言には假名を送らない。

咲く。流る。溯る。越ゆ。
美し。深し。清し。辱し。
右のやうに、用言には語尾を送る。
皆。豈。今。唯。(副詞)

又。且。將。加之。(接續詞)
嘗て。遂に。既に。況や。甚だ。(副詞)
但し。并に。而も。然らば。(接續詞)
右のやうに、副詞・接續詞は二音のものには送らず、三音以上のものに送る。

以上は一般の場合を示したものである。

體言の宿にりを送り、(やどりとよむ場合)用言の候也等に語尾ふりを送らないやうなのは、便宜または慣用からきたのである。

練習

次の文に送假字の誤あらば正せ。

- 一 漣みが白砂に碎てゐる。
- 二 蛙づがいかにも快るよげに鳴てゐる。
- 三 柳の堤み星消て野寺の鐘の音すなり。

- 四 蒼白ろき曉きの波を踏で此方へ近かよる。
- 五 強者存して弱者滅るび強國榮えて弱國衰るふ。
- 六 鴉す群れゆく松原の末糸より上る薄煙り。
- 七 月の光りが雪のやうに葉の上に輝やいてゐる。
- 八 霞みが消た所ろに、烟りの靡びくやうに這てゐるのは房總半島である。

動詞の活用形

第五章 文語の動詞の活用形

用言に活用のあることは既に説いた。今、用言中の動詞の活用について、なほ委しく説明するの要がある。

- 一 鳥鳴か ば
む(ん)
ず

未然形

のやうに、ばむ(ん)ずなどに連つて、動作の未だ成立せぬ意を示す鳴かの如き形を未然形と名づける。

助動詞のむは一般にんと發音し、書く上にもんを用ひる。

- 二 鳥鳴き やむ
たり

のやうに、やむたりなどの用言に連る鳴きの如き形を連用形と名づける。なほこの形は、

鳥鳴き蝶舞ふ。

のやうに、下の文にいひ續ける時にも用ひられる。

- 三 鳥鳴く。

のやうに、文の終末となる鳴くの如き形を終止形と名づける。この語形が動詞の本體である。

- 四 鳥鳴く朝。

終止形

連用形

連體形

のやうに朝といふ體言に連る鳴くの如き形を連體形と名づける。

五 鳥鳴け

ば
ど
ども

のやうに、ばどもなどに連りて動作の既に成立せる意を示す鳴けの如き形を已然形と名づける。

六 鳥よ鳴け

命令形

のやうに、命令の意を示す鳴けの如き形を命令形と名づける。以上六種の用法は、すべての動詞の有する形である。これを動詞の活用形といふ。

練習

次の文中の動詞の活用形をいへ。

- 一 よく泳ぐ者はよく溺る。

動詞の活用の種類

第六章 文語の動詞の活用の種類

動詞の活用形を學んだ上は、進んでその活用の種類を知らねばならぬ。

四段活用は何行に動カウ

四段活用

鳴	語根	活用形				
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
	か	さ	く	く	け	け

右のやうに、その活用が五十音圖の上から順にアイウエの四段にわたるのを四段活用といふ。

動詞の活用は右の圖の如く、鳴くはカ行、讀むはマ行であるやうに、いづれも五十音圖の同一行中に行はれるものである。

二段活用は何行に知れぬ

二 二段活用

カキクケコ

活用段	讀	ま	み	む	む	め	め
ア段	イ段	ウ	エ	段	エ	段	段

用活段二上			活用形
活用段	落	起	
イ	ち	き	未然形
	ち	き	連用形
ウ	つ	く	終止形
	つ	く	連體形
段	つ	くれ	已然形
	れ	れ	命令形
イ	ち	き	
段	ち	き	

用活段二下		
活用段	流	越
エ	れ	え
段	れ	え
ウ	る	ゆ
	る	ゆる
	る	ゆれ
段	れ	れ
エ	れ	え
段	れ	え

右はいづれも五十音圖中の二段にわたつて活用するものであるから、これを二段活用といふ。そして前例の起く落つは五十音圖中の中央より上、即ちイウの二段に活用するので、これを上二段活用といひ、後例の越ゆ流るはその中央より下、即ちエウの二段に活用するので、これを下二段活用といふ。

二段活用の命令形は助詞よを添へてつくる。

三 一段活用

カキクケコ

活用形	一上	
	語根	(見)
未然形	み	み
連用形	み	み
終止形	みる	みる
連體形	みる	みる
已然形	みれ	みれ
命令形	みよ	みよ

一段活用

上二段活用
下二段活用

用活段一	下	用活段
活用段	(蹴)	活用段
エ	け	イ
	け	
	ける	
	ける	
	けれ	
段	け(よ)	段

右はいづれも五十音圖中の一段に活用するものであるから、これを一段活用といふ。そして前例の見るは五十音圖中の中央より上、即ちイ段に活用するのでこれを上一段活用といひ、後例の蹴るはその中央より下、即ちエ段に活用するのでこれを下一段活用といふ。

一段活用の命令形にも助詞よを添へる。
下一段活用の動詞は蹴るの一語よりほかにはない。

練習

上一段活用
下一段活用

次の動詞を活用させてその活用の種類をいへ。

- 知る。買ふ。交ふ。營む。去る。過ぐ。生む。
- 思ふ。考ふ。老ゆ。榮ゆ。拂ふ。除く。生まる。
- 妨ぐ。防ぐ。捕ふ。放つ。學ぶ。教ふ。似る。
- 求む。羨る。進む。退く。射る。捨つ。拾ふ。

次の文中の動詞の活用形と活用の種類とをいへ。

- 一 朝起きて手を洗ひ口を嗽ぎ髪を梳る。
- 二 學者の如く考へ、常人の如く言へ。
- 三 これを仰げば、銀河の九天より落つるに似たり。
- 四 故郷を望みて亡親を慕ひし遺蹟なりと聞く。
- 五 雪降れば躍り、風吹けば街上を走りて歌ふ。
- 六 少年の時に怠りたる者にして、晩年に至り悔いざるはいまだ聞かず。
- 七 見よ、大海に到らでは必ず已まじ休まじと流れ流るゝかの水を。

變格活用

カ行變格活用

八 富みさかゆれば友我に來り、落ちぶるれば我ゆきて彼に求む。
次の文中の動詞に誤あらば正せ。

- 一 山を越ゆ時は用心すべし。
- 二 汝はこの球を蹴れよ。
- 三 今に到るもなほ忘ること能はず。
- 四 食へどもその味を知れず。
- 五 見れども見れず、聞けども聞けず。

四 變格活用

動詞の活用の主なものは、以上の四段・上二段・下二段・上一段・下一段の五種である。このほか、右の五種のいづれにも屬しない特種な活用がなほ四種ほどある。これを變格活用と名づける。

その一 カ行變格活用

語根	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	活用段	オ	イ	ウ		段	オ
	活用形	こ	き	く	くる	くれ	こゝよ
	活用段	オ	イ	ウ		段	オ
	活用形	こ	き	く	くる	くれ	こゝよ

サ行變格活用

右は五十音圖中のイ・ウ・オの三段にわたりて活用する特殊なものであるから、これをカ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は來の一語よりほかはない。これと意味の同じ來るといふ動詞は四段の活用である。この活用の命令形にもよを添へる。

その二 サ行變格活用

活用段	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	活用形	せ	し	す	する	すれ	せよ
	活用段	エ	イ	ウ		段	エ
	活用形	せ	し	す	する	すれ	せよ
	活用段	エ	イ	ウ		段	エ

複合動詞

右は五十音圖中イウエの三段にわたりて活用する特殊なものであるから、これをサ行變格活用といふ。
この活用に屬する本來の動詞は爲とおはすの二語だけである。これと同意味の爲すといふ動詞はサ行四段の活用である。
この活用の命令形にもよを添へる。
このすは名詞副詞漢語等について、次のやうに複合動詞をかたちづくる。

罪名詞す。明かに(副詞)す。進歩(漢語)す。

右の場合は皆サ行變格活用をなすものであるから、この活用語の用ひられる範圍は頗るひろいのである。

練習

次の文についてカ行變格・サ行變格の兩活用動詞を指摘し、その活用形をいへ。

右朝ケルト

の下三(サ)ヲ附
サ行變格トせん

ナ行變格活用

- 一 時は來ぬ。いざ打立たん。
- 二 爲る事爲す事鶯の嘴。
- 三 來らんと思ふ時に來よ。
- 四 能はざるにあらず、せざるなり。
- 五 運動するはよけれど、亂暴はすな。
- 六 祕すと黙すとは、その意を異にす。
- 七 時を善く應用する人は時間の不足を生ぜず。
- 八 度々移植したる樹と度々ひつこしたる家とに、榮えたる例なし。

その三 ナ行變格活用

活用段	死	語根	活用形
	ア段	な	未然形
イ段	ウ	ぬ	連用形
			連體形
エ段	ぬ	ぬれ	已然形
			命令形

右は五十音圖中アイウエの四段にわたり、そしてウ段に^レの添はりて連體已然の兩形をなす特殊なものであるから、これをナ行變格活用といふ。

この活用に屬する動詞は、死ぬの外に往ぬの一語があるばかりである。

この活用の命令形にはよを添へない。

ラ行變格活用

その四 ラ行變格活用

活用段	有	語根	活用形
	ア段	ら	未然形
イ段	り		連用形
	り		終止形
ウ段	る		連體形
エ段	れ		已然形
	れ		命令形

右の活用は四段活用に似てゐるが、四段活用の終止形はウ段であるのに、これはイ段である。かくの如く特別なものであるからこ

形容動詞

れをラ行變格活用といふ。

この活用に屬する動詞は有りの外居り侍りの二語があるばかりである。

この活用の命令形にもよを添へない。

副詞に「有り」が結びついて、次のやうに複合動詞をかたちづくる。これを形容動詞と名づける。

多くあり || 多かり。

靜にあり || 靜なり。

右の場合にはラ行變格活用をなすのである。(第一七章形容動詞の條參照)

練習

次の文についてナ行變格、ラ行變格の兩活用動詞を指摘し、その活用形をいへ。

- 一 國家のために潔く死ぬ。

- 二 その席に侍ること多かりき。
- 三 彼は寺に居れば、行きて逢ひ給へ。
- 四 月に叢雲あれば花に嵐あり。
- 五 我が冠は頭上にあらず、心裡にあるなり。
- 六 死ぬべき時に死なずば、死ぬるに勝る恥あらん。

第七章 文語の動詞の活用の識別

動詞の活用を識別するのに次の便法がある。

一 語数の少きものを語記する。

上一段・下一段の二活用と變格の四活用とに屬する動詞の現に使用されてゐるものは、僅に次に舉げた數語に過ぎないから、悉くこれを語記するのである。

上一段活用動詞

動詞の活用の識別

射る。鑄る。着る。煮る。似る。
干る。見る。(顧る。鑑る。試る。惟る)
居る。率ゐる。

本書には「用ふ」をハ行上二段活用として使用してあるけれども、「用ゐる」とワ行に活用させれば、この上一段活用に屬するのである。

下一段活用動詞

蹴る。

カ行變格活用動詞

來。

サ行變格活用動詞

爲。おはす。

ナ行變格活用動詞

死ぬ。往ぬ。

ラ行變格活用動詞

有り。居り。侍り。

注意

「居り」「恨む」「死ぬ」を四段活用の動詞として用ひることが、今日は許容されてゐる。(許容事項一)

二 その下につく助動詞にて判断する。

語数の少い以上の六種を除いた他の三種については、次に示すやうに、むまたはずがア段につくものは四段活用、イ段につくものは上二段活用、エ段につくものは下二段活用と判断するのである。

鳴か(ア段)ず 四段活用

讀ま(ア段)む

起き(イ段)ず

落ち(イ段)む 上二段活用

受け(エ段)ず

越え(エ段)む 下二段活用

練習

次の文から動詞を擇み出して其の活用形をいへ。

用ふる鍵は常に光る。

臺傾きて苔むしたり。

眠り居る狐に鶏はとり得ず。

全身洗ふが如くに清かれ。

あちら向く君も物いへほとゝぎす。

着て立ちて夜のふすまもなかりけり。

友あり遠方より來る。また樂しからずや。

八 業を務めよ。名譽はおのづから其の中に存す。

次の動詞を活用の上から分類せよ。

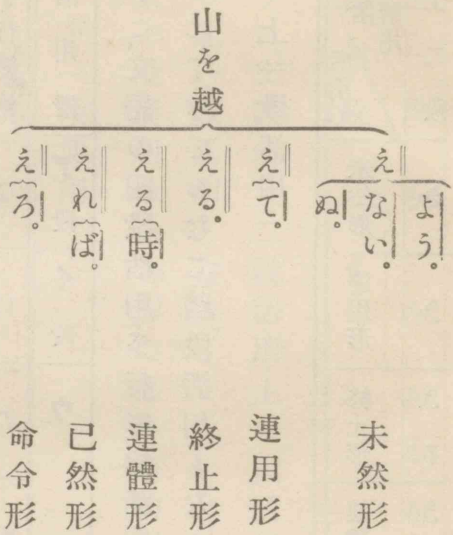
活用ノ種類
格
イ段
エ段
ア段

眠る。閉トづ。運トぶ。見トす。現トす。現トる。制トす。
 刺トす。圖トる。決トす。讓トる。企トつ。斷トつ。服トす。
 攻トむ。延トぶ。申トす。禁トず。強トふ。免トる。遅トかり。

次の文中の動詞に誤あらば正せ

- 一 病を得て死す者多かる。
- 二 國遂に亡ばんこと實にかなしむべし。
- 三 異境に骨を埋トじれよ。
- 四 私トの申トする事餘の儀にあらず。
- 五 盛なる者は必ず衰ふ理なり。
- 六 草木と共に朽つことあるべからず。

第八章 口語の動詞



右のやうに、口語の動詞にも文語の動詞とおなじ六種の活用形がある。

口語の已然形は「山を越えれば海が見えよう」といふやうに、假定の条件を示す。

次に口語の動詞の活用の種類について述べよう。

四段活用

一 四段活用

活用段	文語の活用			活用形
	死	有	鳴	
ナ行變格	ナ	ラ	四	未然形
ア段	な	ら	か	連用形
イ段	に	り	き	終止形
ウ	ぬ	る	く	連體形
段	ぬ	る	く	已然形
エ	ね	れ	け	命令形
段	ね	れ	け	

右のやうに、文語の四段活用「ラ」行變格活用「ナ」行變格活用の動詞は、口語にてはすべておなじ四段活用となる。

上一段活用

二 上一段活用

起	文語の活用		活用形
	上一段	二段	
き	み	み	未然形
き	み	み	連用形
きる	みる	みる	終止形
きる	みる	みる	連體形
きれ	みる	みる	已然形
きるよ	みるよ	みるよ	命令形

下一段活用

三 下一段活用

活用段	文語の活用		活用形
	蹴	越	
下一段	け	え	未然形
エ	け	え	連用形
ける	える	える	終止形
ける	える	える	連體形
けれ	えれ	えれ	已然形
けるよ	えるよ	えるよ	命令形

右のやうに、文語の上二段活用「上」一段活用の動詞は、口語にてはみなおなじ「上」一段活用となる。

口語の上一段活用の命令形には普通助詞「よ」を添へる。

右のやうに、文語の下二段活用「下」一段活用の動詞は、口語にてはい

づれもおなじ下一段活用となる。

口語の下一段活用の命令形にも普通助詞「よ」を添へる。

但しくれるといふ動詞はそれを特つてきて「くれ」といふやうに「る」を添へずに命令となる。

四 カ行變格活用

活用段	(來)カ行變格の活用		活用形
	カ	キ	
オ段	こ		未然形
イ段	き		連用形
ウ段	くる		終止形
	くる		連體形
オ段	くれ		已然形
	こい		命令形

右のやうに、文語にても口語にてもおなじカ行變格活用ではあるが、文語と口語と違ふ點は、かれは終止形が「く」であるのに、これは「くる」となるところである。尙この命令形には普通助詞「い」を添へる。

五 サ行變格活用

カ行變格活用

サ行變格活用

活用段	(爲)サ行變格の活用		活用形
	サ	シ	
イエ段	しせ		未然形
イ段	し		連用形
ウ段	する		終止形
	する		連體形
イエ段	すれ		已然形
	しせ ろよ		命令形

右のやうに、文語にても口語にてもおなじサ行變格活用ではあるが、これは文語と違つて終止形が「する」となり未然形が「せ」のほかに「し」ともなり、又命令形も「せ」のほかに「し」ともなつて、その「せ」には「よ」を添へ、「し」には「ろ」を添へる。

上述のやうに、口語の動詞の活用は、文語の上二段下二段ナ行變格、ラ行變格の四種がなくなり、四段上一段下一段カ行變格、サ行變格の五種だけである。

練習

次の文中の動詞を擇み出してその活用形をいへ。

- 一 雨が飛石をうつてはねかへる。
- 二 行つて見る。見世物がある。
- 三 折々雪の落ちる音が聞える。
- 四 故郷の空を眺めて居ると想像してくれ。
- 五 幸福は求めぬ人を追ひかけてくるものだ。
- 六 彼は死ぬ時まで、母の寫眞をはなさなかつた。
- 七 そのうちに暗くなる、雨は降つてくる、腹は減る。
- 八 何處かに居るに違ひない。早く來い。行つて探さう。

次の文中の口語の動詞の活用形を示し且文語の形に改めよ。

- 一 月は中天にある。流れようとして流れぬ雲が見える。地に落ちる光は冴えるひまがない。
- 二 壊れる家屋から逃げ出る時、追つかける火から避ける時など、互に他をかへりみられるものではない。

- 三 しばし眺めるうちに、山の色がだん／＼變化する。はじめは茶褐色に見える。後には藍色になる。しまひには茶色に光りはじめる。

第九章 文語の動詞の語尾の假名遣

- 恩に報いたり。
- 友を誘ひたり。
- 兵を率ゐたり。

右のやうに、これらの動詞の語尾は皆同じやうに發音しながら、これを書き表す假名は、いひゐであつて、各違つてゐる。このやうに發音では區別のできない語尾を書きわける法を、こゝに動詞の語尾の假名遣といふ。この假名遣に二つの方法がある。

- 一 動詞の活用を行を明かにすること。

動詞はすべて五十音圖中のある一行に限つて活用するものであるから、その動詞の活用が行さへ判然すれば、自然その語尾がわかる。例へば報はいはヤ行、誘ひはハ行、率おはワ行と、それ〴〵その活用の行が明かになれば、自らその語尾がいひかと書きわけられるのである。

二 紛れ易い動詞の中で数の少い方を記憶すること。
語尾の紛れ易いのは、次のア・ハ・ヤ・ワの四行に屬するものである。

①	ひ	⑤	へ	⑨	ア行
②	ふ	⑥	ハ行	⑩	ヤ行
③	ゆ	⑦	ワ行	⑪	ワ行
④	ゑ	⑧	ゑ	⑫	ゑ

右の中ヤ行のい、え、ア行のい、え、及びア行のい、え、ワ行のい、えは區別がない。
なほ濁音で紛れ易いのは次のザ・ダの二行である。

清音ではハ行の動詞が最も多いのであるから、その他のア・ヤ・ワの三行の動詞を記憶する。

ア行の動詞

得	射る	鑄る	下二段活用
得	射る	鑄る	上一段活用

ヤ行の動詞

老 <small>ら</small> ゆ	悔 <small>く</small> ゆ	報 <small>は</small> 酬 <small>は</small> ゆ	上二段活用		
甘 <small>あま</small> ゆ	癒 <small>な</small> ゆ	魔 <small>ま</small> ゆ	覺 <small>おぼ</small> ゆ	聞 <small>き</small> ゆ	消 <small>く</small> ゆ
肥 <small>こ</small> ゆ	越 <small>こ</small> ゆ	凍 <small>こ</small> ゆ	榮 <small>さか</small> ゆ	牙 <small>か</small> ゆ	聳 <small>た</small> ゆ
絶 <small>た</small> ゆ	費 <small>た</small> ゆ	萎 <small>な</small> ゆ	煮 <small>た</small> ゆ	生 <small>な</small> ゆ	映 <small>は</small> ゆ
冷 <small>ひや</small> ゆ	殖 <small>ふ</small> ゆ	吠 <small>な</small> ゆ	見 <small>み</small> ゆ	見 <small>み</small> ゆ	燃 <small>も</small> ゆ

下二段活用

上一段活用

萌ゆ 悶ゆ

ワ行の動詞

居る 率ある

上一段活用

植う 飢う 据う

下一段活用

濁音では、ザ行の動詞は次の一語だけで、他は悉くダ行の動詞である。

交ず ザ行下二段活用

「感ず」「論ず」「辨ず」等もザ行ではあるが、これらはサ行變格活用のすの複合動詞の語尾が濁音になつたものであるから、容易に見わけられる。

練習

次の文に誤あらば正せ。

- 一 よく思えば、毫も恥ずべき所なし。

- 二 一般には、我が物と思えば、輕し傘の雪として傳われり。
- 三 けふこそは病も輕きを覺え、たれとて酒を賜いけり。
- 四 いかでか眞に敬うべき人にむかいて拜伏するを厭うべき。
- 五 大石良雄は刃ものに身を失われ候えども、今以て生きていらるるなり。
- 六 今もし衆議に従わずば、人の望を失いて、思わぬ難儀に逢う事ならん。

次の文の空所に適當な文字をいれよ。

- 一 餓○たる者は食を擇ばず、追○るゝ者は路を擇ばず。
- 二 隨從を願○たるに、人に教○るほどの學徳なしとて、更に許し給○ず。
- 三 次の朝、參朝せんとて約に隨○て彼を誘○るに、門の邊に人立ちさわぎ、内には老○たる母泣き悲しみ居たり。
- 四 陽春四月、野には陽炎燃○、山々には霞たなびく時、櫻花在半天に

雲と見まが○ばかりに咲き句○。
五 余は兄を失○て、悲哀の情に堪○す、人なきところに到りて思○まゝに泣きたり。

形容詞の活用と活用形
形容詞の活用形

第十章 文語の形容詞の活用と活用形
形容詞の活用形

水清く ば魚すまざらむ(ん) 未然形
水清く 流る。 連用形
水清し。 終止形
水清き 池あり。 連體形
水清けれ ば魚すまざ。 已然形

右のやうに、形容詞には五種の活用形がある。
形容詞の活用形は動詞のそれとかはりはないが、たゞ動詞には命

形容詞の活用

形容詞の活用

令形があつて、形容詞にはそれが無い。
形容詞の活用は兩行にわたつてゐる。この點は、同行に限られてゐる動詞の活用とは違つてゐる。

活 段	美 し 同 じ	高 清	語 根	活用 形
			未 然 形	連 用 形
ウ 段	く	く	く	く
イ 段	美 し 同 じ	し	し	し
エ 段	け れ	け れ	き	き
			終 止 形	連 體 形
			已 然 形	

右のやうに、形容詞は力行・サ行の兩行にわたり、ウ・イ・エの三段に活用する。

形容詞の語根にし又はじのある語は、その本體のまゝで終止形を

なすのである。

注意

美しの終止形を美ししといふやうに用ひる習慣あるものは、語尾をししと重ねることを、今日は許容されてゐる。(許容事項 二)

練習

次の文中の形容詞についてその活用形をいへ。

- 一 燕も乾く色なし五月雨。
- 二 身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。
- 三 かしこには嶮しき巖あり、こゝには激しき流あり。
- 四 二つの竈を造るは易く、一つの竈に火を絶やさぬは難し。
- 五 山は麗し。しかもこれ壤の堆きのみ川はのとけし。しかもこれ水の逝くに過ぎざるのみ。
- 六 この君の御代のためでたき始に、彼が正しき忠勤の道に入る、弓矢

口語の形容詞

第十一章 口語の形容詞

語根		活用形					
清	美	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	
し	し	○	○	く(う)	い	い	けれ
				く(う)	い	い	けれ

- 七 窓ぎはに脊伸ひして、遠方をながむれば、赤き屋根白き屋根、そのはては青き海。
- 八 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ。

右のやうに、口語の形容詞はく、い、けれと活用する。語根にし又はじのある語も、文語と違って終止形に何のかはりもない。

連用形は地方によつて引となる。また口語に於ても命令形のな
いは文語の場合と同様である。

練習

次の文中の形容詞の活用形を示し且これを文語に改めよ。

- 一 遠い親類より近い他人。
- 二 言葉多いは品少いとやら申します。
- 三 形ばかり美しくても善い人とはいはれぬ。
- 四 心の正しい人は書いた字まで正しい。
- 五 家に戻りましたのは随分遅うございました。
- 六 暗く寂しい室の中に、豆のやうな赤い火が見えた。
- 七 薄ぎたないなりではあるが、いかにもりゝしい容貌である。

- 八 深い霧の中、凄じい雨の中、世にもおそろしい思をした。
- 九 日が暮れてあたりは薄ぐらいけれど、空には生白い一道の光が見えた。
- 一〇 めづらしいこの訪問者の顔を、長い間見てゐるうちに、優しい微笑を見つげ出した。

第十二章 用言の音便

踏み……月を踏んで歸る。(文語)

高く……天高引して馬肥えたり。(文語)

苦しき……苦しい時の神だのみ。(文語)

右のやうに、用言の活用形が他の語に續く場合に、その發音が便宜上他の音に轉ずることがある。これを音便といふ。口語では音便が一般に用ひられてゐる。

イ音便

音便の四種

一 イ音便

動詞 聞き……聞いて驚く。(文語)
仰ぎ……仰いで見る。(文語)

形容詞

善き……善いふるまひ。(文語)
悲しき……悲しいかな。(文語)

右のやうに、動詞はカ行ガ行の四段活用、形容詞は連體形の^カが^イに轉ずるのをイ音便といふ。

ウ音便

二 ウ音便

動詞 問ひ……問うて曰く。(文語)
笑ひ……笑うて答へず。(文語)

形容詞

青く……青う澄みたり。(文語)
正しく……正しうすわる。(文語)

撥音便

三 撥音便

動詞 讀み……讀んで見る。(口語)
學び……學んで悟らず。(文語)
死に……死んでゆく。(口語)

形容詞

安み……安んず。(文語)

右のやうに、動詞はマ行ハ行の四段活用及びナ行變格活用の連用形^ミに^ウに轉じ、形容詞は連體形^クが^ウに轉ずるものをウ音便といふ。

促音便

四 促音便

動詞 勝ち……勝つて驕らず。(文語)
買ひ……買つて與ふ。(文語)

右のやうに、夕行ハ行ラ行の四段活用及びラ行變格活用の連用形
ちひりが促音のつに轉ずるを促音便といふ。
形容詞には促音便がない。

練習

次の文中の音便を指摘してその原の假名を示せ。

- 一 飛んで火にいる夏の蟲。
- 二 あかるう見えて心地がよい。
- 三 澄みきつて居る秋の空を一群の雁が渡つた。
- 四 善くて安い物を買ひ込んで身代を潰す人が多い。
- 五 立つて居る百姓は、膝を折つて居る金持より脊が高い。

次の文中に誤あらば正せ。

第十三章 文語の助動詞の種類

- 一 今更いふても詮なひこと。
- 二 多ふ聞ひて少ふいふべし。
- 三 子供は父の跡を逐ふて進むだ。
- 四 喜むで居る人の顔は輝ひて見える。
- 五 秋の日の暮れ易ふ、黄昏の色は次第に深ふならふとする。

次の文中の用言の音便に改め得られるものを改めよ。

- 一 最も親しき友を失ひたり。
- 二 自然を愛する美しき性情の一面なり。
- 三 俳句に至りては、季のなきものは句にならずとなす。
- 四 遙に敵の城を望みて、みな勇みたちたり。
- 五 松陰深きその宮に人影もなし。燈明一つ點りて居らず。余は
そこの松に倚りかゝりてやゝ久しく立ちたり。

受身の助動詞

助動詞は動詞に結びついてその作用を助ける語であるが、稀には體言・助詞または他の助動詞にも結びつく。助動詞はその役目の上から、受身・可能・使役・尊敬・時・打消・推量・指定・詠歎・希望・比較の十一種に大別される。

一 受身の助動詞

敵に圍まる。
世人に賞讃せらる。

のやうに、動作を他からしかけられる意味を示するらるを受身の助動詞といふ。

二 可能の助動詞

飛行機にてゆかばゆかる。
かの山も越えれば越えらる。

のやうに、能力を示するらるを可能の助動詞といふ。

可能の助動詞

使役の助動詞

このるは受身の助動詞と同じものである。

三 使役の助動詞

本を買はす。
本を教へさす。
本を讀ましむ。

のやうに、他のものに動作をさせる意を示すさすしむを使役の助動詞といふ。

尊敬の助動詞

四 尊敬の助動詞

父上新聞を讀まる。
大臣懇に尋ねらる。
母上衣を縫はせ。
主上臨幸せさせ。

給ふ

給ふ

殿下會場に臨ましめ給ふ。

のやうに、敬意を示するらる。せす(す)させ(さす)しめ(しむ)を尊敬の助動詞といふ。

受身可能のるらる。使役のすさすしむはこの尊敬の助動詞と同じである。このうちのすさすしむは概ね動詞の「給ふ」又は尊敬の助動詞「らる」に結びついて用ひられる。

時の助動詞

五 時の助動詞

花をみて今日も暮しつ。

庭の花咲きぬ。

庭の花咲きたり。

庭の花咲けり。

庭の花既に咲きき。

庭の花既に咲きけり。

庭の花明日は咲かむ(ん)。

のやうに、動作の行はれる時を示すつぬたりりきけりむ(ん)を時の助動詞といふ。

この助動詞の中つぬたりりは動作の完了せる意を示すので完了の助動詞といひ、きけりは動作の過去に屬する意を示すので過去の助動詞といひ、むは動作の將來に起るべき意を示すので未來の助動詞といふ。

六 打消の助動詞

雨降らず。

願はくは雨降らざれ。

雨降らじ。

雨降るまじ。

打消の助動詞

のやうに、動作を否定する意を示すざれ(ざり) じまじを打消の助動詞といふ。ざりは打消のずに動詞の「あり」の結びついたもので、これには終止形がない。

じまじは推量の意味をもつ打消の助動詞である。

推量の助動詞

七 推量の助動詞

雪の降るらむらん。

雪の降るらし。

雪降るべし。

雪降るべかり。

雪降るめり。

雪と見ゆるは花ならむん。

雪降らまし。

雪降りけむけん。

のやうに、推量の意を示すらむ(らん) らし べし べかり めり む まし けむ(けん)を推量の助動詞といふ。

この助動詞の中で、むは時の助動詞と同じである。べかりはべしが動詞の「あり」と結びついてできたものである。けむは過去を推量する意を示す。なほらむ けむ はらん けんと書いて、すべてむとは發音しない。めりましなどは古文擬古文以外には用ひられない。

指定の助動詞

八 指定の助動詞

時は金なり。

君君たり。

のやうに、事物を指定する意を示すなり たりを指定の助動詞といふ。

この助動詞は普通體言に結びつく。時の助動詞のたりは、この指定のたりと同じ形であるが、その用法は全く違つてゐる。

なほ指定の助動詞と時の助動詞とを區別するには、その文の全體の意味の上からも判断すべきである。

詠歎の助動詞

九 詠歎の助動詞

入相の鐘の音すなり。

こゝもまた憂世なりけり。

のやうに、感動の意を示すなりけりを詠歎の助動詞といふ。この助動詞は、古文ことに歌謡の上に用ひられてゐる。

希望の助動詞

一〇 希望の助動詞

郷里へ歸りたし。

人は皆かくあらまほし。

比較の助動詞

のやうに、願意を示すたしまほしを希望の助動詞といふ。

一一 比較の助動詞

火の消ゆるごとし。

光陰は矢のごとし。

目に見るがごとし。

のやうに、比較の意を示すごとしを比較の助動詞といふ。この助動詞は助詞がのにも結びつく。

練習

次の文中の助動詞の種類をいへ。

- 一 討つも討たるゝも武士のならひ。
- 二 山も崩さる。沼も埋めらる。
- 三 その家頗る富みたり。されば十分の教育をうけらる。
- 四 千歳の下いよゝ、光を増しぬ。後人の渴仰長く止まざるべし。

助動詞の活用

助動詞活用
の

可能の助動詞
には命令形が
ない。

- 五 臺傾いて苦むせり。松風のみや通ふらむ。簾絶え聞あらはなり。月影のみぞさしいりける。
- 六 みよし野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり。
- 七 松も千年を待たず薪に碎かれ、ふるき墓も鋤かれて田となりぬ。
- 八 我は自ら知らざれども、我が母がその身の危きをも顧みず、我が身を護りくれたるは幾度なるか知られざらむ。

第十四章 文語の助動詞の活用

助動詞の活用は動詞に類するものと、形容詞に類するものと、そのいづれにも似ない特殊なものとの三種にわかたれる。

一 動詞状活用の助動詞

可受 種 類	活用形	未然形	れ
		連用形	れ
能身	活用形	終止形	る
		連體形	る、
	活用形	已然形	るれ
		命令形	れよ
		活用	下

指 定	推 量	打 消	時					使 役		尊 敬		
			た	な	て	しめ	させ	せ	られ			
なら	べから	○	ざら	(ら)	(けら)	たら	な	て	しめ	させ	せ	られ
なり	べかり	○	ざり	(り)	○	たり	に	て	しめ	させ	せ	られ
なり	○	めり	○	り	けり	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる
なる	(べかる)	める	ざる	る	ける	たる	ぬ	つ	しむる	さする	する	らるゝ
なれ	(べかれ)	めれ	ざれ	(れ)	けれ	たれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ
なれ	○	○	ざれ	(れ)	○	(たれ)	ね	(てよ)	しめよ	させよ	せよ	られよ
活 格 變 行 ラ			ナ 變 活 用		用 活 段 二							

形容詞狀活用
の助動詞

二 形容詞狀活用の助動詞

詠		用
歎		
○	○	たら
○	○	たり
けり	なり	たり
ける	なる	たる
けれ	なれ	たれ
○	○	たれ

特殊活用の助
動詞

三 特殊活用の助動詞

比	希	打	推	種類		活用
				種類	活用	
較	望	消	量	種類	活用	
ごとく	まほしく たく	まじく	べく	未然形	未然形	
ごとく	まほしく たく	まじく	べく	連用形	連用形	
ごとし	まほし たし	まじ	べし	終止形	終止形	
ごとき	まほしく たき	まじき	べき	連體形	連體形	
○	まほし たけれ まほしけ	まじけれ	べけれ	已然形	已然形	

以上の表中括弧を施してあるのは、古文又は擬古文の外には用ひられないものである。

注意

推	量	打	消	時	種類		活用	
					種類	活用		
○	(ませ)	○	○	○	ず	○	○	未然形
○	○	○	○	○	ず	○	○	連用形
けむ	まし	らむ	らし	じ	ず	き	む	終止形
けむ	まし	らむ	らし	じ	ぬ	し	む	連體形
けめ	ましか	らめ	らし	じ	ね	しか	め	已然形
○	○	○	○	○	○	○	○	命令形

次のやうに、過去の助動詞きの連體形のしを終止形に用ひることが、今日は許容されてゐる。

當時余は彼を良友として迎へたりし。(許容事項 三)

練習

次の文中の助動詞の種類と活用形とを示せ。

- 一 山雨來らんとして風樓に滿ちぬ。
- 二 負ひたる子に淺瀬を教へらる。
- 三 泥鰯の捕へられんとや思ひけん。
- 四 都會風を吹かせて、田園生活を蔑視せんとするが如し。
- 五 大地は下より突上げられ、天も墜つるかと思はれたり。
- 六 悪事をして刑せらるゝ者も、政事の届かぬゆゑと御袖を絞らせ給ひけり。

第十五章 口語の助動詞

受身の助動詞

口語の助動詞は多く文語の助動詞の轉化したものであるが、中にはまた全く特殊なものもある。

一 受身の助動詞

敵に圍ままれる。

犬に吠なえられる。

のやうに、受身の助動詞はれるられるの二語である。

二 可能の助動詞

行けば行かれる。

見れば見られる。

のやうに、可能の助動詞はれるられるの二語である。

三 使役の助動詞

本を買かはせる。

本を教へさせる。

使役の助動詞

可能の助動詞

尊敬の助動詞

のやうに、使役の助動詞にはせるさせるの二語がある。

四 尊敬の助動詞

父上は新聞を讀まれる。

先生は今日渡歐せられる。

後ほど伺ひます。

のやうに、尊敬の助動詞にはれるられるますの三語がある。

使役	尊	尊可受	種類		活用形
			敬	敬能身	
させ	ませ	られ	れ	未然形	
させ	まし	られ	れ	連用形	
させる	ます	られる	れる	終止形	
させる	ます	られる	れる	連體形	
させれ	ますれ	られ	れ	已然形	
させ	ませ	られ	れ	命令形	

時の助動詞

以上は動詞状態活用の助動詞である。このうち可能及び尊敬のれるられるには命令形がない。

五 時の助動詞

花が咲いた。

明日は花が咲かう。

これから花を見よう。

のやうに、時の助動詞にはたうようの三語がある。このうちたは過去と完了とを示し、うようは未來を示す。

たがガ行・ナ行・バ行・マ行の四段活用に續く時は「急ぎた」が「急いだ」「死にた」が「死んだ」「運びた」が「運んだ」「踏みた」が「踏んだ」のやうに、その動詞の語尾が音便によつて變化したがだとなる。

六 打消の助動詞

雨が降らぬ。

打消の助動詞

指定の助動詞

雨が降らなからう。
 雨が止まない。
 雨に濡れまい。

のやうに、打消の助動詞にはぬなからないまいの四語がある。
 七 指定の助動詞

あれが富士山だ。
 日本は天の愛子です。
 矯めるなら若木のうち。

のやうに、指定の助動詞にはだですならの三語がある。

時	活用形	
	種類	
た	未然形	○ ○
た	連用形	○ ○
た	終止形	よ う
た	連體形	○ ○
た	已然形	○ ○
	命令形	○ ○ ○

推量の助動詞

八 推量の助動詞

以上のうち打消のないだけが形容詞活用で、他は悉く特殊活用の助動詞である。

指	打
定	消
だ せ ら	な から
だ し つ	な か つ
だ す	ぬ (ん)
○ ○	ぬ (ん)
○ ○	ね
○ ○ ○	○ ○ ○

明日は雪になるらしい。
 のやうに、推量の助動詞はらしいの一語である。然し時のうよう
 打消のまいは、
 さぞ雪がつもらう。

希望の助動詞

大抵空は晴れよう。
容易に雪はやむまい。

九 希望の助動詞

故郷へ歸りたい。

のやうに、希望の助動詞には「たい」の一語がある。

一〇 比較の助動詞

満開の花が雲のやうだ。

のやうに、比較の助動詞には「やうだ」の一語がある。この語はまた推量にも用ひられる。

比較の助動詞

種類	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
	推量	○	らしく	らしい	らしい	○

希望	○	たく	たい	たい	たけれ
比較	やうだら	やうだつ	やうだ	○	○

以上「やうだ」は特殊活用、他は形容詞狀活用の助動詞である。

練習

次の文中の助動詞を指摘せよ。

- 一 土地の麗しさを愛でさせられたのであらう。
- 二 夏の日が蝸の歌におくられて暮れてゆけば、空には露のやうに星がきらめきはじめた。
- 三 この分ならばアルプスの主脈も見えないことはあるまいと思つて、小屋の背後の臺の上に登つて見た。
- 四 底知れぬ谷底まで生え續いて居るらしく見える柔かな草原の上に、横たはつて見たくなつた。
- 五 自然と人工との美を集めたこの町に、外では見られぬ面白味が

なければならぬ筈ではあるまいか。

次の文中の助動詞の種類と活用形とをいへ。

- 一 記憶が鞏固にならなければ、活用も自在にならない。
- 二 本人の満足は言ふに及ばず、余も世話甲斐のあつたことを喜んだ。
- 三 このあたりの美しさには、心を惹かれずに居られるものでない。
- 四 此處は春も好い處ですけれど、秋もまた他で味はへぬよい感じのする處で御座います。

副詞の用法

第十六章 副詞の用法

風俄に起る。

月がいよ／＼澄み渡る。

右の文中、俄にいよ／＼は起る、澄み渡るの用言に、直ちに添つてゐる副詞である。

る副詞である。

恰も月の光に似たり。

漸く我が家に歸りついた。

右の文中、恰も漸くは、他の語を隔て、似たり、歸りついたの用言に添つてゐる副詞である。

朝日いと花やかにさし上る。

極めて穩にいひ諭した。

右の文中、いと極めては花やかに穩にの他の副詞に添つてゐる副詞である。

上述のやうに、副詞には直ちに用言に添ふものと、他の語を隔て、下の用言に添ふものと、他の副詞に添ふものと、三様の用法がある。

風涼しく吹く。

水が清く流れる。

右の文中、涼しく清くは本来形容詞であるが、このやうにその下の用言に添つて、その意味を限定するときは、副詞の役目をしてゐるのであるから、既に形容詞ではなく副詞となつたのである。形容詞は連用形から轉じて副詞となるのである。なほ副詞には、形容詞以外の語から轉ずるものも少くない。

練習

次の文について副詞を擇み出しその用法を説明せよ。

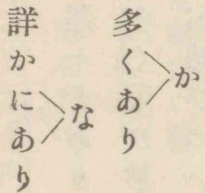
- 一 新月の影まさに海角をはなれんとす。
- 二 僅に山僧の通ふ小徑がほそくと通じてゐる。
- 三 その名がいかにもふさはしく、さながら造化の手が繰出して居るやうだ。
- 四 書體は頗る圓熟したるものにして、その中自ら英雄の氣象のあらはるゝを見る。

- 五 しみじく、とうちまもる程に、いつしか日は落ちて、さむき風窓をうつ。
- 六 大空の半圓は、遠く野のはてを限つて、ほの暗い野の面には低く風が流れて行くのか、藪の枯草がかさくと鳴つて居る。

第十七章 形容動詞

群れゐる鳥も多かるべし。
今朝の新聞に詳かなり。
春日遅々たり。

右の多かる、詳かなり、遅々たりは、



遅々^たとあり

のやうに、多く(本來は形容詞)・詳かに遅々との副詞の語末くにに動詞「あり」が結びついたものである。

形容動詞の活用はラ行變格動詞と全く同一である。

活用形	語根		
	多	詳	遅
未然形	から	かな	た
連用形	かり	なり	たり
終止形	かり	なり	たり
連體形	かる	なる	たる
已然形	かれ	なれ	たれ
命令形	かれ	なれ	たれ

形容動詞の活用には右のかりなりたりの三種があつて、形容詞から轉來したものはかりの活用、状態を示す漢語の複合はたり、其の他本來または轉來の副詞はなりの活用である。

口語にては

やすからう悪からう。(未然形)

善かれあしかれ。(已然形)

詳かならよいが。(未然形)

詳かなものだ。(連體形)

のやうに、かりなりの活用は、その未然形連體形已然形などが用ひられる。

注意

異にの副詞からなる形容動詞異なりを「ことなれり」と用ひることが、今日では許容されてゐる。(許容事項四)
なほ體言に續く助動詞の、

彼は友人なり。

君君たり。

のやうななりたりと、この形容動詞の活用と混同せぬやうに注意せ

ねばならぬ。

助詞の種類

第十八章 助詞の種類

助詞は助動詞と同じやうに單獨には用ひられず、その上に活用もない語であるが、皆それらの意義用法があつて、一様ではない。助詞はその附屬する語の上から大體次の三種にわけらる。

體言に附屬する助詞

一 體言に附屬する助詞

- 名譽の戰死。
- 君が御代。
- 友を送る。
- 海に浮ぶ。
- 前へ進め。
- 雪と炭。

用言に附屬する助詞

右ののがをにへとよりまでにてで等は、主として體言に結びついて語と語との關係を表す助詞である。

二 用言に附屬する助詞

- 花咲かば來れ。
- 花咲けば來る。
- 花咲けど來らず。
- 花咲けども來らず。
- 花咲くとも來らじ。

花は咲けるに雪なほ降る。
 花は咲けるを鶯はきなかず。
 友を訪ひしが不在なりき。
 語りつゝ行く。
 俯きながら語る。
 斃れて後已む。
 訪はで歸りぬ。

右の「ば」「ども」とも「に」を「が」「つゝ」ながら「て」「で」等は、主として用言に結びついて、語句を接續する用をなす助詞である。

種々の語に附
 屬する助詞

三 種々の語に附屬する助詞

泣く
 のみなり。
 ばかりなり。
 立錐の地だになし。

柳は緑なり。
 雨降り雷さへなり出づ。
 我也行かむ。
 ぞ眺むる。
 月を
 なむ眺むる。
 こそ眺むれ。
 何をか言はむ。
 ありやなしや。
 な忘れそ。
 我を忘るな。
 本國へ歸らばや。
 悲しいかな。

右の「のみ」「ばかり」「だには」「さへも」「ぞ」「なむ」「こそ」「か」「や」「な……」「そ」「な」「ば」「や」「か」

な等は、種々の語に結びついて指示疑問・反語・禁止・希望・感歎などの意を表す助詞である。

練習

次の文中の助詞を指摘せよ。

- 一 鼠捕る猫は爪をかくすといへり。
- 二 千丈の堤も蟻の穴より壊る。
- 三 いかなる名山も長くこれに對すれば厭かざるを得ず。
- 四 佛法信仰はよき事なれど、佛に願ふよりは身に行ふがよろしく候。
- 五 嵐の山の秋の暮一夜をあかすほどだにも、旅寝となれば物うきに今をかざりと願みて、帝都をあといは出で給ふ心の中ぞあはれなる。

次の文を各品詞に分類せよ。

- 一 雨滴も絶えざれば石を穿つ。
- 二 小が積つて大となる。
- 三 井戸涸れて水の貴きことを知る。
- 四 志は大なるをよしとす。
- 五 彼は不幸なる少年なりき。
- 六 誰とこの志を語らう。然し今更これを言ふのは愚痴だ。
- 七 春の花の中で、最も都會にふさはしいのは櫻であらう。
- 八 はや黄昏の影寄せぬ。風おもむろに吹き通ふ都大路の夏景色。

附 録

文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日
文部省告示第百五十八號)

- 一、〔居リ〕〔恨ム〕〔死ヌ〕ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二、〔シク・シ・シキ〕活用ノ終止言ヲ〔アシシ〕〔イサマシシ〕ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三、過去ノ助動詞〔キ〕ノ連體言〔シテ〕終止言ニ用キルモ妨ナシ。
(例) 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四、〔コトナリ〕〔異テ〕〔コトナレリ〕〔コトナリテ〕〔コトナリタリ〕ト用キルモ妨ナシ。
- 五、一、セサス〕トイフベキ場合ニ〔セテ〕略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 手習サス。

周旋サス。
賣買サス。

六、「、セラル」トイフベキ場合ニ、「、サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 罪サル。
評サル。

解釋サル。

七、「得シム」トイフベキ場合ニ、「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

(例) 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

(例) 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。
攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九、てにをは「ノ」ハ、動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇、疑ノてにをは「ヤ」ハ、動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一、てにをは「トモ」ノ、動詞・使役ノ助動詞、及、受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一三、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

一三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキ

ニ限り、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

(例) 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四、上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

(例) 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五、てにをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

(例) 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六、「トイフ」トイフ語ノ代リニナルヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ
妨ナシ。

(例) イハユル哺乳獸ナルモノ。
顔回ナルモノアリ。

國語假名遣一覽表

ワ(ハ) あわ(泡沫)あわつ(周章)くつわ(轡)くるわ(廓)いわし(鱒)よわし(弱)うわる(植)かわく(渴)
乾)くわぬ(慈姑)ことわざ(諺)ことわり(理)さわぐ(騒)さわやか(爽)しわ(皺)しわる(撓)すわる(坐)た
わむ(撓)はらわた(腸)ひわ(鴉)たわやめ(手弱女)みわ(酒瓮)うらわ(浦回)しわざ(所業)こわいろ(聲色)
語頭には發音通りの假名、語の中又は下には右の外はハを用ひる。

牛(イヒ) む(猪)亥・井・堰・蘭(ぬざり)壁)むしき(譬)ぬど(井戸)ぬなか(田舎)ぬもり(蝶蝨)ぬる(居)
ゐる(率)ぬのこ(冢)ぬのしし(猪)ぬろり(圍爐裏)以上の外、語頭にはイを用ひる。あぢさゐ(紫陽花)あ
ぬ(藍)うなる(髻髮)かたる(乞食)くらぬ(位)くれなる(紅)くわぬ(慈姑)ひきぬる(率)まぬる(參)もとの
(基)いぬる(乾)かもぬ(鴨居)くもぬ(雲居)しきぬ(敷居)とのぬ(宿直)とりぬ(鳥居)まとのぬ(圓居・團欒)
語中にイを用ひるもの。かい(權)つい(不思)老い(ヤ行上二段の動詞の連用形)おほいに(大)おいかけ
(綏)さい(紀伊)きさい(后)さいづち(小槌)さいはひ(幸)しいか(詩歌)しいじ(四時)しいす(弒)せい(身
長)たいまつ(松明)ぢい(爺)ついたち(朔日)ついたて(衝立)ついち(築土)ついで(序)ついでむ
(隊)ひいき(量負)ひいちぢ(曾祖父)ひいば(曾祖母)むいか(六日)やいば(刃)おいて(於)とほい(遠)し

ろい(白) 以上多くは音便によつてキガイとなつたもので、形容詞の連體形及び動詞の連用形の轉化である。

ウ(ユ、フ) うう(ワ行下二段の動詞)あきうど(商人)おちうど(落人)かりうど(獵人)しうと(舅)しうとめ(姑)たびうど(旅人)にうめん(煮麵)ひうが(日向)ふうふ(夫婦)ウ音便には以上の外、思うて・乞うて・問うた等。ユ ヤ行上下二段の動詞、此の外ユと發音するもの、但し言ふは別、又字音は例外。以上の外は語の中尾にフを用ひる。

エ(エ、ヘ) ㄨ(繪・餌笑)ㄨぐし(醜)ㄨぐる(剝)ㄨそ(鱸)ㄨづく(嘔吐)ㄨふ(醉)ㄨむ(笑)ㄨんじゆ(槐)ㄨがく(晝)ㄨがほ(笑顔)ㄨくぼ(靨)ㄨさ(餌)ㄨつぼ(笑壺)ㄨどる(彩)ㄨぼし(烏帽子)ㄨま(繪馬) 以上の外、語頭には エ。こㄨ(聲)すㄨ(末)つㄨ(杖)つくㄨ(机)ゆㄨ(故)いしㄨ(礎)こすㄨ(梢)すㄨ(もの(陶器)ちㄨ(智恵)ともㄨ(巴)ゆㄨ(ん(所以)うㄨ(植)飢) エ ㄨㄨㄨ(蝶螺)ぬㄨ(鴨)はㄨ(鮪)ひㄨ(稗)ふㄨ(笛)いりㄨ(入江)かㄨ(え(庚)きㄨ(え(甲)つちㄨ(え(戊)ながㄨ(轆)ひㄨ(どり(鶉)ひㄨ(こば(え(麩)ひのㄨ(丙)みづㄨ(え(壬)もㄨ(ぎ(蒟黃)ゆㄨ(ば(夕映)ヤ行下二段動詞の連用形。以上の外語の中尾にはへ。

ヲ(オ、ホ、フ、ウ)を(夫・雄・男・尾・麻・緒・小・岑)をか(岡・陸)をかし(可笑)をかむ(拜)をぎ(荻)をけ(桶)

をけら(朮)をこ(痴)をこぜ(臙)をさ(長)をさ(箴)をさなし(幼)をさむ(治・修)をさ(大抵)をしむ(惜)をしき(折敷)をしどり(鴛鴦)をしふ(教)をそ(癩)をち(遠)をぢ(伯叔父)をつと(夫)をこ(男)をどし(緘)をとつひ(一昨日)をととし(一昨年)をとめ(少女)をとり(囀)をどり、をどる(踊)をの(斧)をのく(戰慄)をば(伯叔母)をはる、をふ(終)をひ(甥)をみなへし(女郎花)をめく(叫喚)をり(檻)をり(時節)をる(居折)をろち(蛇)をんな(女)をがは(小川)をこがまし(癡)をす(雄・牡)をだまさ(草環)をのへ(岑上)をばな(尾花)をりづめ(折詰)をりふし(折節)ををし(雄々) 以上の外、語頭にはオ。あを(青)あをむく(仰)いさを(功)うを(魚)かつを(鯉)かをり、かをる(香)さを(竿・棹)しをらし(可憐)しをり(菜)しをる(萎)しをん(紫苑)たをやか(婀娜)たをやめ(手弱女)とを(十)とをむ(撓)まをす(申)みさを(操)みを(落)やをら(徐)わざをぎ(俳優)さげを(下緒)さつを(獵夫)さるをかせ(松蘿)さをしか(小男鹿)たけを(猛夫)たまのを(玉緒)たをる(手折)つづらをり(九折坂)ばせを(芭蕉)はなを(鼻緒)ひを(氷魚)ますらを(丈夫)むらをさ(村長)めをと(夫婦) フ あふご(杓)あふぐ(仰)あふぎ(扇)あふち(棟)あふひ(葵)あふり(障泥)あふる(煽)いてふ(公孫樹)あふけなし(過分)かげるふ(陽炎・蜉蝣)きのふ(昨日)けふ(今日)こふ(鶴)たふす(倒・仆)たふとし(尊・貴)てふ(蝶)ふくろふ(梟)あふみ(近江)あふて(追手)こふづ(國府津)そのふ(園生)とほたふみ(遠江)にふ(丹生)はにふ(殖生) ウ かうぞ(楮)かうぢ(麴)たうめ(老女)まらく(設・儲)をう(唯) う音便のもの(妹・嫗・御父様・弟・笋・神々・格子・柑子・上野・香・冠・頭・神戶・被・蝙蝠

紙捻・小路・紺屋・冊子・峠・仕・手水・手斧・女房・箒・拍子・申・八日以上の外、語の中尾には **ホ**、但し、
八行活用の動詞は勿論フ。

ジ(チ) あじか(海驢)あらかじめ(豫)あるじ(主・饗應)いちじるし(著)いみじ(甚)うじ(蛆)うなじ
(頂)おなじ(同)かじか(鯨)かじく、かじかむ(萎縮・畏寒)かじる(嚙)かたじけなし(辱)きじ(雉)くじ
(籤)くじく(挫)くじる(扶)こじり(鑑)さじ(匙)さじき(棧敷)しじみ(蜆)しじら(緘)すさまじ(凄)たじろ
く(辟易)つじ(辻)つつじ(躑躅)つむじ(旋風)とじ(刀自)なじる(詰)にじ(虹)にじる(蹂)はじ(檻)はじか
み(蓋)はじく(彈)はじむ(始)はじめ(初)ひじき(鹿尾菜)ひじり(聖)ひつじ(羊)ひもじ(餓)まじ(助動詞)
まじなひ(禁厭)まじふ(交・混)まじめ(真面目)まじる(交・混)まじろく(瞬)みじかし(短)むじな(貉)むら
じ(連)あじろ(網代)かうじ(柑子)かもじ(髦)からうじて(辛而)こじき(乞食)こじつけ(附會)なじむ(馴
染)にじむ(鈍染)なまじひ(愁)ふじ(富士)まなじり(毗)みじろく(身動)もじ(文字)やじり(鏝)ろんじ
(論)ザ行活用動詞。連濁(榻・著の外) 以上の外は**チ**。ち(地・痔・持・等は字音假名)

ズ(ツ) かず(數)かならず(必)きず(疵・傷)くず(葛)すず(鈴)すず(錫)すず(數珠)すずき(鱸)すずむ
(涼)すずし(涼・生絹)すずしろ(蘿蔔)すずな(菘)すずめ(雀)すずり(硯)すずろ(漫)なすらふ(準)ねすみ
(鼠)はず(筈)弭はずみ(機)ひずむ(歪)ます(交・混)みみず(蚯蚓)もず(百舌鳥)あんず(杏子)いしずる

(礎)こずる(稍)たたずむ(竹)ゆず(柚子) ザ行活用動詞。連濁の場合は上の字の濁音である。以上の外
は **ツ**。づ(圖・頭等は字音)

カ行下二段	ワ行下二段	ラ行下二段	ヤ行下二段	マ行下二段	バ行下二段	ハ行下二段	ナ行下二段	ダ行下二段	タ行下二段	ザ行下二段	サ行下二段	ガ行下二段	カ行下二段	ア行下二段
(蹴)	植	恐	消	勤	弛	教	兼	出	棄	交	寄	告	受	(得)
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
ける	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う
ける	うる	る	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる
けれ	うれ	れ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
カ行下一段	ワ行下一段	ラ行下一段	ヤ行下一段	マ行下一段	バ行下一段	ハ行下一段	ナ行下一段	ダ行下一段	タ行下一段	ザ行下一段	サ行下一段	ガ行下一段	カ行下一段	ア行下一段
(蹴)	植	恐	消	勤	弛	教	兼	(出)	棄	交	寄	告	受	(得)
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
ける	ゑる	れる	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる
ける	ゑる	れる	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる
けれ	ゑれ	れ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え

動詞活用文語・口語對照表

種	活	用	の	類	語形		未	連	終	連	語	
					根	形					然	令
カ行四段	行	騷	が	か	行	騷	か	か	ぎ	き	行	騷
サ行四段	行	押	さ	が	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
タ行四段	行	立	た	さ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ハ行四段	行	問	は	ち	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
マ行四段	行	學	ま	び	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
バ行四段	行	讀	ば	ひ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ラ行四段	行	知	ら	み	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ナ行變格	行	有	な	ら	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
カ行變格	行	死	な	ら	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
サ行變格	行	爲	せ	こ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
カ行上一段	起	過	ぎ	き	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ガ行上一段	過	落	ち	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
タ行上一段	落	恥	ち	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ダ行上一段	恥	強	ぢ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ハ行上一段	強	亡	ひ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
バ行上一段	亡	恨	び	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
マ行上一段	恨	報	み	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ヤ行上一段	報	懲	い	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ラ行上一段	懲	居	り	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
カ行上一段	(着)	に	き	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ナ行上一段	(似)	に	き	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ハ行上一段	(干)	に	き	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
マ行上一段	(見)	み	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ヤ行上一段	(射)	い	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ワ行上一段	(居)	ゐ	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
カ行下一段	(得)	え	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ガ行下一段	告	げ	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
サ行下一段	寄	せ	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ザ行下一段	交	ぜ	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
タ行下一段	棄	て	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ダ行下一段	(出)	で	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ナ行下一段	兼	ね	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
ハ行下一段	教	へ	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷
バ行下一段	弛	べ	ぎ	ぎ	行	騷	が	か	ぎ	き	行	騷

カ行下一段	ワ行下一段	ラ行下一段	ヤ行下一段	マ行下一段	バ行下一段	ハ行下一段	ナ行下一段	ダ行下一段	タ行下一段	ザ行下一段	サ行下一段	ガ行下一段	カ行下一段	ア行下一段	ワ行上一段	ヤ行上一段	マ行上一段	ハ行上一段	ナ行上一段	カ行上一段	ラ行上一段	ヤ行上一段	マ行上一段	バ行上一段	ハ行上一段	ダ行上一段	タ行上一段	ガ行上一段	カ行上一段	サ行變格	カ行變格	ナ行變格	ラ行變格	マ行四段	バ行四段	ハ行四段	タ行四段	サ行四段	ガ行四段	カ行四段		
(蹴)	植	恐	消	勤	弛	教	兼	出	棄	交	寄	告	受	(得)	(居)	(射)	(見)	(干)	(似)	(着)	懲	報	恨	亡	強	恥	落	過	起	(爲)	(來)	死	有	知	讀	學	問	立	押	騷	行	
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	せ	こ	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	し	き	に	り	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	
ける	ゑ	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	ゆる	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	す	く	ぬ	り	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	
ける	ゑ	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	ゆる	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐる	くる	する	くる	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	
けれ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	る	ゆ	れ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	す	れ	ぬ	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	せ	こ	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	
カ行下一段	ワ行下一段	ラ行下一段	ヤ行下一段	マ行下一段	バ行下一段	ハ行下一段	ナ行下一段	ダ行下一段	タ行下一段	ザ行下一段	サ行下一段	ガ行下一段	カ行下一段	ア行下一段	ワ行上一段	ヤ行上一段	マ行上一段	ハ行上一段	ナ行上一段	カ行上一段	ラ行上一段	ヤ行上一段	マ行上一段	バ行上一段	ハ行上一段	ダ行上一段	タ行上一段	ガ行上一段	カ行上一段	サ行變格	カ行變格	ナ行四段	ラ行四段	マ行四段	バ行四段	ハ行四段	タ行四段	サ行四段	ガ行四段	カ行四段		
(蹴)	植	恐	消	勤	弛	教	兼	出	棄	交	寄	告	受	(得)	(居)	(射)	(見)	(干)	(似)	(着)	懲	報	恨	亡	強	恥	落	過	起	(爲)	(來)	死	有	知	讀	學	問	立	押	騷	行	
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	し	こ	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	し	き	に	り	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	
ける	ゑ	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	ゆる	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐる	くる	する	くる	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	
ける	ゑ	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	ゆる	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐる	くる	する	くる	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	
けれ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	る	ゆ	れ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	す	れ	ぬ	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け
け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	し	こ	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	

較比	望希	歎詠	定指	量
ごとし	まほし たし	けり なり	たり なり	けむ <small>(心)</small> まし めり べから べし
ごとく	まほしく たく	○ ○	たら なら	○ (ませ) ○
ごとく	まほしく たく	○ ○	たり なり	○ ○ ○ べかり
ごとし	まほし たし	けり なり	たり なり	けむ <small>(心)</small> まし めり ○ べし
ごとき	まほしき たき	ける なる	たる なる	けむ <small>(心)</small> まし める べかる べき
○	まほしけれ たけれ	けれ なれ	たれ なれ	けめ ましか めれ べかれ べけれ
○	○ ○	○ ○	たれ なれ	○ ○ ○ ○ ○
やうだ	たい		なら です だ	
やうだら	○		なら でせ だら	
やうだつ	たく		○ でし だつ	
やうだ	たい		○ です だ	
○	たい		な ○ ○	
○	たけれ		なれ ○ ○	
○	○		○ ○ ○	

助動詞活用文語・口語對照表

指	量	推	消	打	時			敬	尊	役使	能可	身受	種類																					
					來未	去過	了完						本形	傍用形																				
なり	けむ(む)	まし	めり	べから	べし	らし	らむ(む)	まじ	じ	より	ず	む(ん)	けり	き	り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	本形	傍用形		
なら	○	(ませ)	○	べから	べく	○	○	まじく	○	より	ず	○	(けら)	○	(ら)	たら	な	て	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形	連用形		
なり	○	○	○	べから	べく	○	○	まじく	○	より	ず	○	○	○	(り)	たり	に	て	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	終止形	連體形		
なり	けむ(む)	まし	めり	○	べし	らし	らむ(む)	まじ	じ	○	ず	む(ん)	けり	き	り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	本形	傍用形		
なる	けむ(む)	まし	める	べかる	べき	らし	らむ(む)	まじ	じ	ある	ぬ	む(ん)	ける	し	る	たる	ぬ	つる	しむる	さする	する	らる	る	しむる	さする	する	らる	る	らる	る	連體形	已然形		
なれ	けむ(む)	まし	めれ	べかれ	べけれ	らし	らめ	まじ	じ	なれ	ね	め	けれ	しか	(れ)	たれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ	已然形	命令形		
なれ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	なれ	○	○	○	○	(れ)	たれ	ね	て	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	○	○	○	○	命令形	
だ						らしい		まい	なから	ない	ぬ(ん)	よう	う	た			た			ます	られる	れる		させる	せる	られる	れる	られる	れる	本形	傍用形			
だら						○		○	なから	○	○	○	○	たら			たら			ませ	られ	れ		させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形	連用形			
だつ						らしく		○	なかつ	なく	ず	○	○	たり			たり			まし	られ	れ		させ	せ	られ	れ	られ	れ	終止形	連體形			
だ						らしい		まい	○	ない	ぬ(ん)	よう	う	た			た			ます	られる	れる		させる	せる	られる	れる	られる	れる	本形	傍用形			
○						らしい		○	○	ない	ぬ(ん)	○	○	た			た			ます	られる	れる		させる	せる	られる	れる	られる	れる	連體形	已然形			
○						○		○	○	なけれ	ね	○	○	たれ			たれ			ます	られ	れ		させ	せ	られ	れ	られ	れ	已然形	命令形			
○						○		○	○	○	○	○	○	○			○			まし	させ	せ	○	○	させ	せ	○	○	○	○	命令形			

文

語

口

語

較比	望希	歎詠	定指	量	推	消	打	時			敬	尊	役使	能
								來未	去過	了完				
ごとし	まほし たし	けり なり	たり なり	けむ <small>(む)</small> まし めり べから べし	らし らむ <small>(む)</small>	まし じ なり ず		む <small>(ん)</small>	けり き	り たり ぬ つ	しむ さす す	らる る	しむ さす す	らる
ごとく	まほしく たく	〇 〇	たら なら	〇 (ませ)	〇 〇	まじく 〇 なら ず		〇	(けら) 〇	(ら) たら な て	しめ させ せ	られ れ	しめ させ せ	られ
ごとく	まほしく たく	〇 〇	たり なり	〇 〇 〇	〇 〇	まじく 〇 なり ず		〇	〇 〇	(り) たり に て	しめ させ せ	られ れ	しめ させ せ	られ
ごとし	まほし たし	けり なり	たり なり	けむ <small>(む)</small> まし めり 〇 べし	らし らむ <small>(む)</small>	まし じ 〇 ず		む <small>(ん)</small>	けり き	り たり ぬ つ	しむ さす す	らる る	しむ さす す	らる
ごとき	まほしき たき	ける なる	たる なる	けむ <small>(む)</small> まし める べか べき	らし らむ <small>(む)</small>	まし じ ぬ ぬ		む <small>(ん)</small>	ける し	る たる ぬ つる	しむ さする する	らる る	しむ さする する	らる
〇	まほしけれ たけれ	けれ なれ	たれ なれ	けめ まし め べか べけれ	らし らめ	まじ じ ぬ ぬ		め	けれ しか	(れ) たれ ぬ つれ	しむ さす す	らる る	しむ さす す	らる
〇	〇 〇	〇 〇	たれ なれ	〇 〇 〇 〇	〇 〇	〇 〇 ぬ 〇		〇	〇 〇	(れ) たれ ぬ て	しむ さす せ	らる る	しむ さす せ	〇
やうだ	たい		なら です だ		らしい	まい なから ない ぬ <small>(ん)</small>		よう う	た	た	ます られる れる		させる せる	られる
やうだら	〇		なら でせ だら		〇	〇 なから 〇 〇		〇 〇	たら	たら	ませ られ れ		させ せ	られ
やうだつ	たく		〇 でし だつ		らしく	〇 な なく ず		〇 〇	たり	たり	まし られ れ		させ せ	られ
やうだ	たい		〇 です だ		らしい	まい 〇 ない ぬ <small>(ん)</small>		よう う	た	た	ます られる れる		させる せる	られる
〇	たい		な 〇 〇		らしい	〇 〇 ない ぬ <small>(ん)</small>		〇 〇	た	た	ます される れる		させる せる	られる
〇	たけれ		なれ 〇 〇		〇	〇 〇 な けれ ぬ		〇 〇	たれ	たれ	ます られ れ		させ せ	られ
〇	〇		〇 〇 〇		〇	〇 〇 〇 〇		〇 〇	〇	〇	まし ませ 〇 〇		させ せ	〇

昭和六年十一月六日
昭和六年十一月九日
昭和六年十二月廿五日
昭和六年十二月廿八日

印刷發行
訂正印刷
訂正發行

著作權所有



不許複製

編者

發行者

印刷者

新國文典 定價金四拾四錢

關根正直
笹川種郎

東京市神田區仲猿樂町三〇番地

株式會社 帝國書院

代表者 增田啓策

東京市牛込區山吹町一九八番地

山本禎男

發行所

東京市神田區仲猿樂町三〇番地
株式會社 帝國書院

振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所

三宅莊藏書店

大阪市東區橫堀四丁目三番地

振替口座大阪六九番

Faint, illegible text and markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

甲

山陽中學校

森本隆司

広島大学図書

2000080452

